

凡例

一、本書は、Jules Michelet [Histoire de France] のなかの「中世編」を全訳し六巻に分けたものである。翻訳には一九八一年に Robert Laffont 社から出版された一巻本、Michelet [Le Moyen Age] を用いたが、Flammarion の全集本（一九七四年刊）も参照した。

一、ロベール・ラフォン社の一巻本には巻頭にクロード・メトラの紹介文「Présentation」とミシュレ自身の「一八六九年の序文」が付されており、いずれもミシュレの『フランス史』とりわけ「中世史」がもっている特質を理解するうえで貴重であるが、本訳書ではミシュレの序文を巻頭に掲載した。

一、地名・人名の表記については、こんにちベルギーになっている地域のたとえば都市名は、フラマン語式に表記するのが普通であるが、中世においてはフランドルの大部分がフランス王国に属していたし、ミシュレの本書でもフランス王国のフランドル伯領やブルゴーニュ公領として述べられているので、本訳書でも、たとえばブルッヘやイーペルはフランス語式にプリュージュ、イーブルなどとした。ただしアントウェルペン、フランス語ではアンヴェルスだが、日本人にとって馴染みになっている英国式のアントワープにした。また人名も、中世初期は、おそらくラテン語式が用いられていたと考えられ、多くはラテン語式表記を用いたが、必ずしもそれに囚われることなく、一般的に定着している呼称を用いた。一、人物の生存年や事件が起きた年代で、原書の文中には記されていないが、理解に役立つと思われるものはカッコをつけ算用数字を書き加えた。

目次

一八六九年の序文——ジュール・ミシュレ 2

第一部 ケルト人・イベリア人・ローマ人 39

第一章 ケルト人とイベリア人 40

第二章 カエサルによる征服の前後 73

第三章 ローマ帝政下のガリア 99

第四章 ケルト人の運命 141

第二部 ゲルマン人 169

第一章 民族移動からメロヴィング王朝まで 170

第二章 カロロヴィング家の人々(七〜十世紀) 265

第三章 カロロヴィング帝国の解体 317

第三部 フランスの容貌(タブロー・ド・ラ・フランス) 385

ブルターニュ 391

アンジュー地方からポワトゥーへ	405
リムーザン	416
ガスコーニュ	419
ピレネー	422
ラングドック	431
プロヴァンス	435
ドーフィネからブルゴーニュへ	443
ジュラからヴォージュへ	448
アルデンヌの森	451
リヨンとオータン	454
シャンパーニュ	462
ノルマンディーとフランドル	465
イル＝ド＝フランス	476
パリ	482
訳者あとがき	494
人名索引	516

一八六九年の序文

ジュール・ミシュレ

わたしが約四十年をかけることになるこの骨の折れる著作を着想したのは、《七月の閃光》が走った時〔訳注・一八三〇年七月〕のことであった。あの忘れがたい日々のなかで、一つの大きな光が生じ、そこにわたしは《フランス》をはっきりと見出したのだった。

フランスには幾つもの編年記 (*annales*) はあったが、フランスを一つの存在として捉えた歴史書 (*une histoire*) はなかった。優れた人々のなかにはフランスの歴史を学んでいた人もいるが、それらは、もっぱら政治的観点からの歴史で、宗教的・経済的・芸術的などの活動に関して、細部にわたって理解している人はいなかったし、フランスという国を形成している自然的・地理的要素を統合的に展望している人もいなかった。

わたしが試みたのは、フランスを一つの魂、一個の人格として見ることであった。そうした稀な前例としてシスモンディ〔訳注・1771-1842 『フランス史』三十一巻を著した〕がおり、彼は政治的

編年史をめざしながらも、その正視眼と粘り強い努力によって全体観に近いものを生み出したが、深い学識を示す研究には踏み込んでいない。その点については、彼自身、ジュネーヴで執筆したため、法令集や古文書などを調べることができなかったことを告白している。

しかも、一八三〇年ごろまでは、歴史家の誰ひとりとして、印刷された本に書かれている以外の事実や原資料、国立文書館に保存されている古写本だの古文書を調べる必要性を感じていなかったことも事実である。一八二〇年から一八三〇年にかけて輝きを放ち、《歴史学のプレイアッド》と呼ばれているバラント、ギゾー、ミニエ、ティエール、オーギュスタン・ティエリといった人々も、そのめざした歴史はさまざまな特定の視点からのそれであった。

〔訳注・バラント Barante (1782-1866) は、第一帝政下と王政復古期に知事、駐トリノ大使、駐ペテルブルグ大使を務め、二月革命で隠退。『ブルゴーニュ公国の歴史』『国民議会史』などを著した。ギゾー Guizot (1787-1874) は、当初は自由主義派政治家として活躍したが、七月革命後は保守派に転じ首相にまどなったが、二月革命でイギリスに亡命。帰国後は歴史学の教授として『フランス史試論』『フランス文明史』『ヨーロッパ文明史』などを著した。ミハエ Mignet (1796-1884) は、反党派派ジャーナリストで、フランス革命および十六世紀の歴史を専門とした。ティエール Thiers (1797-1877) は、ミニエとともに反党派派ジャーナリストだったが、政治家になってルイ・フィリップ時代に首相を務め、ナポレオン三世の時代は追放されたが代議士に返り咲き、パリ・コミューンに対しては強硬な弾圧を加え、第三共和制初代大統領になり、『執政官および帝政の歴史』を書いた。ティエリ Thierry (1795-1856) は、サン＝シモンの秘

書をしたこともある自由主義者で、メロヴィング王朝時代の歴史などを書いた。」

これらの人々の関心事は制度や人種の構成の問題で、それらが孤立したものではなく相互に連関しあっていることには、あまり注意を向けなかった。たとえば人種は、移り変わる風俗習慣の影響を受けないで独自性を保ちうるかとか、制度・機構は思想や社会的背景を考慮せずして解明できるか、といったことには無関心であった。専門分化はつねに多少とも人為的な面をもっており明確化しようとするほど、その上のレベルに働いている調和を無視するため、誤った容貌を提示し、全体観を見失わせる危険性を秘めている。

生きた生命は君主的でかなりうるさい注文屋である。それは、完全である場合にしか、本当の意味での生命ではない。諸器官はすべてが連帯しあっており、いっしょにでなければ機能しない。器官の一つでも欠けると、すべてが、もはや生きてはいられないのである。かつては、身体の器官それぞれをメスで切り離して生かし続けることができるのでは、と考えられたが、すべてが作用し合っているのであるから、そんなことは不可能である。

歴史という生命も、それを再発見するためには、すべての道、すべての形、すべての要素を根気よく辿る必要があるとともに、それ以上に、生命自体となる一つの強力な働きのなかで、個々の力の相互作用を甦らせ、すべての動きを回復させることに、より大きな情熱を傾けることが必要である。

画家のジェリコー（一七九一—一八二四、『メデューズ号の筏』で有名）は、ルーヴル（当時、ルー

ヴルにはヨーロッパじゅうの美術作品が集められていた)に入ったとき、少しも困惑した様子をみせないで、「よし、わたしが芸術というものを作り直そう!」と言った。もし一八一五年のワートルローでの敗北と連合軍によるパリ占領がなかったら、言葉どおりにやり遂げていたであろう。「(注・エルバ島を脱出し復位したナポレオンがワートルローの戦いで敗れ、セント＝ヘレナ島に流された。)わたしには彼のような天分はないが意志の強さでは負けない。そのようなものが、『青春時代』の情熱であり激しさであった。

わたしが掲げた歴史の課題は、表面においてでなく、諸機構の深い内面で「全体的生命を復活」させることであつたから、それを上回る複雑さをもっているのは当然であつた。賢明な人なら、そんなことは避けただらうが、幸か不幸か、わたしは賢い人間ではなかつた。まだ若く、『七月の閃光』が走つた朝のことで、その希望と強力な電気のおかげで、なにもものにもたじろぐことはなかつた。

しばらくは、なんの障碍もなかつた。情熱は、すべてを単純化する。ここでは、複雑に錯綜した事柄もほどけて互いの本当の關係を見出させてくれる。バラバラであつたときは活力がなく重かつたゼンマイも、全体のなかに正しく組み込まれると、軽々とすべてを動かすはじめる。これが、少なくともわたしの信念であつた。この信仰箇条は、わたしの弱点であつたものをも動かした。

『フランス』という巨大な生命は、作動を開始するために、自然と技術の多様な力を折り合わせようとする。最初はなかなか巧いかないが、その巨大な身体を構成する民族や各地方が、大西洋からライン河、ロース河へ、そしてアルプス山地へと配置され、『未熟なガリア』から何世紀もか

けて《自立的フランス》に生長していった。

敵も味方も、フランスは生きていと言う。しかし、生きていと言うことは、何をもって、そう言えるのか？ 生氣というのは一種の熱である。ときとして、生体の電気現象は、生命そのものを超えるような不調和、驚異、小奇跡を生じさせることがあるが、ほんとうの生命は、それとは別の特異性をもっている。それが、生の持続性である。生まれるのは一息にであるが、そこから、ゆっくりと穏やかに《一つの持続性 *une tenore*》をもって生長していくのが生命である。その統一性は五幕の小劇のそれではなく、大きな発展を示す魂の調和的自己同一性である。

最も手厳しい批評家も、わたしの本の全体を見るなら、こうした生命の働きを見逃すことはないであろう。第一巻から最終巻まで、そこにあるのは緩慢な持続であり、同じ方法論に貫かれていることが分かるはずである。このように長い歳月をかけた仕事にしては稀なほどに、同じ形式と色彩が保たれており、長所も同じなら短所も同じであるはずである。もし、それが途中で変わったり消えたりしていたら、この著作は異種混交の産物となり、独自の個性をもつものにはなっていないからであろう。

わたしがこの仕事を始めたとき、一冊の優れた本があった。著者のティエリは明敏で洞察力に秀で、精緻な解釈者であり偉大な彫金師であるが、ひとりの師匠にあまりにも盲従的であった。その師匠とは人種の永続性についての過度に体系的な見方である。その大著の美点をなしているのは、

人名索引

※欧文表記は原著に従った。

【ア行】

アインハルト (エジナール) Eginhard
275, 291, 292, 311
アヴィオラ (アキリウス) Aviola,
Acilius 103
アヴィトゥス Avitus 137, 197
アヴィトゥス (聖) Avitus 152, 198,
204, 206
アウグスティヌス (聖) Augustin
139, 152, 347
アウグスティヌス (オーガスティン)
Augustin 251
アウグストゥス Auguste 100, 102,
105-107, 118, 128, 153, 184, 300,
432, 455
アウトアリット Autarite 54
アウルス・ゲリウス Aulu Gelle 116
アウレリアヌス Aurélien 117, 118,
128
アウレルキー Aulerces [兄カルヌー
テス Carnutes、弟ケノマーニ
Cenomans] 48
アエギディウス Egidius 195, 197
アエティウス Aetius 180, 190-192
アエネーイス Enée 155
アエリアヌス Aelianus 125

アギルルフ Agilulfe 252
アキレス Achille 179
アギンベルト Agimbert 328
アグリコラ Agricola 110, 115, 438,
439
アゴバルト Agobart 285
アーサー (王) Arthur 24, 163, 164,
399, 402
アストルフ Astolph 276
アタウルフス Ataulph 183-185
アタナシウス Athanase 136, 410
アダム Adam 137, 327
アーダルハルト Adalhard 266, 319,
320, 322
アダルベルト Adalbert 273-274
アッコ Acco 92
アッタルス (聖) Attale 205
アッティラ Attila 179, 180, 188-194,
206, 471, 479
アティス Athis 17
アト At 54
アドニス Adonis 17
アナスタシウス (法王) Anastase
218
アナスタシオス Anastase 197
アニアヌス (司教) Anianus 191
アニエス・ソレル Agnès Sorel 408

ジュール・ミシュレ (Jules Michelet)

フランス革命末期の1798年8月にパリで生まれ、父親の印刷業を手伝いながら、まだ中世の面影を色濃く残すパリで育ち勉学に励んだ。1827年、高等師範の歴史学教授。1831年、国立古文書館の部長、1838年からコレージュ・ド・フランス教授。復古的王制やナポレオン三世の帝政下、抑圧を受けながら人民を主役とする立場を貫いた。1874年2月没。

桐村泰次 (きりむら・やすじ)

1938年、京都府福知山市生まれ。1960年、東京大学文学部卒 (社会学科)。欧米知識人らとの対話をまとめた『西欧との対話』のほか、『仏法と人間の生き方』等の著書、訳書にジャック・ル・ゴフ『中世西欧文明』、ピエール・グリマル『ローマ文明』、フランソワ・シャム『ギリシア文明』、『ヘレニズム文明』、ジャン・ドリュモワ『ルネサンス文明』、ヴァディム&ダニエル・エリセーエフ『日本文明』、ジャック・ル・ゴフ他『フランス文化史』、アンドレ・モロワ『ドイツ史』、ロベール・ドロール『中世ヨーロッパ生活誌』、フェルナン・ブローデル『フランスのアイデンティティ I・II』、ミシェル・ソ他『中世フランスの文化』(論創社)がある。

フランス史 [中世] I

HISTOIRE DE FRANCE: LE MOYEN AGE

2016年9月10日 初版第1刷印刷

2016年9月20日 初版第1刷発行

著者 ジュール・ミシュレ

訳者 桐村泰次

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232

振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

装幀 野村 浩

印刷・製本 中央精版印刷

ISBN978-4-8460-1554-1 ©2016 Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。